

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 13 日現在

機関番号：32606

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720326

研究課題名（和文） 修験道組織の形成と地域的展開に関する研究

研究課題名（英文） Research on formation of the Shugendo organization, and local deployment

研究代表者

近藤 祐介（KONDO YUSUKE）

学習院大学・文学部史学科・助教

研究者番号：40578689

研究成果の概要（和文）：『聖護院文書』に含まれる中世史料について調査を行い、そうした史料の複写作業を実施した。複写を終えた史料は整理分類し、順次翻刻作業を進めている最中である。『聖護院文書』などの分析の結果、一六世紀初頭に新たな経済基盤の構築を目指す聖護院門跡側の動向と、檀那場の保持・拡大を図る在地山伏側の意図が結びつき本山派成立へ至ったことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The document of medieval history included in the "Shogo-in document" was investigated. And the copy work of such document was done.

It became clear for the trend by the side of the Shogo-in temple which aims at construction of new economic infrastructure at the beginning of the 16th century, and the intention by the side of the ascetics (*yamabusi* 山伏) which aims at maintenance and expansion of the faith area to have been connected, and to have resulted to the main sect of Japanese mountain asceticism formation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,100,000 円	330,000 円	1,430,000 円

研究分野：日本中世史

科研費の分科・細目：人文学・日本史

キーワード：修験道、本山派、山伏

1. 研究開始当初の背景

修験道に関する研究は宗教学や民俗学のアプローチから進められており、歴史学とくに文献史学からの分析は立ち遅れていた。そのため、修験道の歴史的展開や各時代で果たしていた固有の役割を捉えることが難しくなっていると考えられる。

こうした研究状況にあって、修験道組織に関する研究はこれまでの修験道研究の中心

的課題であり、かつ歴史学的検討も進められているテーマでもあり、これまでの他分野の研究成果とも共有することのできる重要な研究テーマであると言える。

こうした研究状況を踏まえて、今後の修験道研究の進展のためには、修験道本山派と呼ばれる修験道組織（山伏組織）の成立過程を、中世寺院史の方法論・観点から検討し、その歴史的展開をたどることで 15 世紀～17 世紀

における宗教勢力と地域社会の関わりを追究する必要があると考えた。

本山派の成立史については和歌森太郎氏の『修験道史研究』（河出書房、1943年）以来、修験道史の主要テーマとして扱われてきた。現在の研究の成果は宗教学者である宮家準氏『修験道組織の研究』（春秋社、1999年）に代表される。しかし、これまでの研究では本山派の成立史が教団史の視角から論じられており、本山派の成立が自明視されていた感は拭えない。そのため、本山派の成立が持つ歴史的意義や社会的背景が十分に論じられていないのではないかと考えた。

そうした中であって、長谷川賢二氏の研究（「中世後期における顕密寺社組織の再編—修験道本山派の成立をめぐる—」『ヒストリア』125、1989年、ならびに「中世後期における寺院秩序と修験道」『日本史研究』336、1990年）は在地山伏の動向から本山派の成立を見通した研究として注目される。長谷川氏は近江国観音寺を事例に地域に存在した山伏の自律的な共同体を「発見」し、こうした山伏結合が裁判権の委託などを契機として聖護院門跡傘下に組み込まれていく事を論じ、その後の研究に大きな影響を与えた。だが近年増山智宏氏は長谷川説を再検討する中で、観音寺が近世には延暦寺末寺となっているという事実を指摘している（「修験道本山派形成過程の再検討」『史苑』64、2003年）。したがって、現在は長谷川説をそのまま受容することは出来ない。

以上のような先行研究を踏まえ、これまで本研究代表者は山伏組織の構造とその変容を論じる中で、聖護院門跡と在地山伏の動向を目配りしながら研究を進めてきた。その主な成果としては①「中世後期の東国社会における山伏の位置」（『民衆史研究』77号、2009年）、②「修験道本山派における戦国期的構造の出現」（『史学雑誌』119編4号、2010年）、③「後北条領国における聖護院門跡と山伏」（池享編『室町戦国期の社会構造』所収、吉川弘文館、2010年）が挙げられる。

①では、東国においても長谷川氏が指摘したような山伏の地域的結合（以下これを山伏結合と表現する）が存在していたこと、山伏結合には集団の代表となる有力な山伏がおり、彼らを媒介として上位権力と交渉を持ったこと、戦国期になるとこうした山伏結合のあり方に変化が見られることなどを指摘した。

②では聖護院門跡などの発給した文書の分析を通じて、16世紀初頭に門跡と院家を中核とする中央組織の構造が変化していること、その背景には荘園経済の行き詰まりから、

新たな財源の確保を目指す聖護院門跡の意向があったことを明らかにした。そしてその結果、それまでの院家乗々院と熊野先達との結合を軸とした組織から、聖護院門跡と年行事の結合を軸とした組織への本質的転換が行われ、これにより在地山伏集団という新たな社会的基盤から成る組織（本山派）が出現したことを論じた。

③では武蔵国を事例に、戦国期の在地山伏と聖護院門跡の関係を検討し、聖護院門跡が在地における山伏間紛争を調停する権力として期待されていたことを論じた。

こうした本研究代表者の研究成果から、本山派組織の成立の画期が16世紀（戦国期）にあること、こうした山伏組織の成立には聖護院門跡（中央組織）と在地の山伏結合（地方組織）の関係が重要な論点であることが明確になった。

2. 研究の目的

これまでの研究代表者の研究成果から、本山派組織の成立の画期が16世紀（戦国期）にあること、こうした山伏組織の成立には聖護院門跡（中央組織）と在地の山伏結合（地方組織）の関係が重要な論点であることが明確になった。これを踏まえて次に、（1）門跡と院家を中核とした中央組織の変遷の解明、（2）在地山伏集団（地方組織）の形成および門跡と結びつく過程の解明、という二点を追究していく。

（1）

室町期～戦国期（14～16世紀）を対象に、聖護院門跡と院家を中核とした門跡組織（中央組織）の具体的な変遷過程を当該期の政治的・社会的動向と関連付けながら分析する。

（2）

「年行事職」という戦国期に登場する新たな職に注目して検討を行う。この「年行事職」を媒介として聖護院門跡と在地山伏が結びつく背景を検討することを通して、上位権力（聖護院門跡）による編成という側面からだけではなく、在地の山伏側の動向から本山派成立の意義を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)

本研究では聖護院に伝来した『聖護院文書』と呼ばれる史料群は注目に値する。『聖護院文書』は現在、聖護院古文書調査室によって調査・整理が行われており、史料の目録が『本山修験』（聖護院発行の機関誌）や『山岳修験』5号にその1部が掲載されている。本研究ではそうした目録を手掛かりに『聖護院文書』の内から中世史料をピックアップして検討を行う。聖護院は近世に2度火災にあっているため失われた中世史料も多いが、『山岳修験』掲載の目録だけでも100点以上（年欠文書を含めれば200点近い）の中世史料が含まれていることが確認でき、しかもそのほとんどが現在まで研究上利用されていない新史料群である。したがって『聖護院文書』の学術的価値は極めて高いと言える。この「聖護院文書」を調査・複写し分析することを通じて修験道組織の形成過程について明らかにしていく。

(2)

自治体史などをはじめとした史料集に所収された在地修験寺院に残された聖護院門跡から発給された補任状などの史料を集め、年行事職の分析を行う。

4. 研究成果

(1)

『聖護院文書』の調査は中世文書を中心に複写を終えたものから順次、整理分類し目録を取りながら翻刻作業を進めているところである。今後こうした作業を進めながら、分析を進めていきたい。

(2)

『聖護院文書』の調査・分析の過程で得た知見をもとに、これまで研究の手薄であった鎌倉末～室町初期における聖護院門跡の動向を法流や武家祈禱との関係が明らかにした。この研究成果については「一四世紀における武家祈禱と寺門派門跡」(『学習院史学』51号、2013年)として発表した。

この論文では、鎌倉末期～14世紀後半までの実相院の相承関係を考察した。そこから、観応の擾乱や門跡内部の対立により門跡相承に混乱があり、結果的に増仁が実相院を相承したこと、護持僧として初期の室町幕府武家祈禱に参仕したことなどを明らかにした。また、増仁の次に実相院を相承した良瑜の活動について検討を行った。ここでは良瑜と武

家祈禱との関わりが14世紀後半の武家祈禱政策の改編によって生じたこと、二条家出身の良瑜が実相院を相承したのは後継者不在という状況に規定されたものであること、こうした偶発的条件にも支えられ、良瑜による寺門派法流の統合と再編が行われたことなどを明らかにした。そのうえで、良瑜嫡弟の道意による聖護院再興は、良瑜の後継者問題を解決し、聖護院を二条家によって相承される門跡とするために行われた方策であったことを指摘した。

(3)

自治体史を中心とした史料の収集・分析を行い、年行事職という新たな「職」が戦国期に登場することになる歴史的背景について明らかにした。この研究成果の一部を2013年9月刊行予定の『修験道史研究入門』(岩田書院)の「本山派の歴史と展開」において発表する予定である。

この論考では、本山派成立史の代表的研究者である和歌森太郎氏、新城美恵子氏、長谷川賢二氏、宮家準氏らの研究を取り上げ、その成果と課題を明らかにした上で、本山派の成立と展開を概説した。

また、本山派の成立に関しては、聖護院門跡と在地山伏という二つの軸を設定して考察し、戦国期における両者の動向をそれぞれ分析したうえで、その接合の背景を明らかにした。

17世紀以降の展開については、主として江戸幕府の諸制度と絡めつつ検討を行った。

(4) 課題

本研究期間中に『聖護院文書』中の中世史料をすべて調査・複写し終えることができなかった。また史料の具体的な分析については必ずしも十分に深めることができなかった点は課題として残された。今後も分析を進めるとともに、収集した史料を活用した研究を準備していきたい。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)
近藤祐介、一四世紀における武家祈禱と寺門派門跡、学習院史学 51 号、査読有、2013 年、pp38-55

[学会発表] (計 件)

[図書] (計 1 件)
時枝務・長谷川賢二・林淳編近藤祐介共著、「本山派の成立と展開」『修験道史研究入門』所収、岩田書院、2013 年出版予定

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 祐介 (KONDO YUSUKE)
学習院大学・文学部史学科・助教
研究者番号：40578689

(2) 研究分担者
無し ()

研究者番号：

(3) 連携研究者
無し ()

研究者番号：